

# 編年体御書目録『祖書目次』の遺文配列について

木村 中一

一、はじめに、

日蓮教学・教団史上で、その教義と信仰は、日蓮聖人（以下、聖人と記す）の記された「遺文」を基として成り立っていることは言うまでもない。この遺文は高弟らによって継承され、その形態も真筆、写本、刊本と時代の流れと共に変化していった。このような流れの中で大きな役割を果たしたのが集成本の存在であり、第一次集成本「録内御書」、第二次集成本「録外御書」は、今もなおその詳細について多くの論点を有している。集成本の収録遺文配列、特に「録内御書」の遺文配列は目録より「立正安国論」を始めとする五大部を前方に配し、その後に教義上重要である遺文から優先に配列されているように見受けられる。そして先にも述べたように時代の流れと共に、近世においてこの「録内御書」は刊本化され、世に流

布して行くのである。しかし遺文を基とした教学理解が進むにつれ「録内御書」の遺文配列とは異なる、遺文をイロハ順で配列した「イロハ分類」の御書目録<sup>(一)</sup>が編集され、その後には聖人の生涯に沿って順番に遺文配列がなされた「編年体御書目録」が集成されるのである。

「編年体御書目録」については山川智<sup>(二)</sup>成氏をはじめ、浅井要麟氏<sup>(三)</sup>・鈴木一成氏<sup>(四)</sup>が総合的に各目録を考察している。また各目録について山川智<sup>(五)</sup>成氏、浅井要麟氏<sup>(六)</sup>、世古政順氏<sup>(七)</sup>、堀日亨氏<sup>(八)</sup>、安中尚史氏<sup>(九)</sup>などが詳細な考察をなしている。しかし「編年体御書目録」全体についてその成立の意義などについて包括的に検討した論考はなされていないように見受けられる。そこで本稿では、「編年体御書目録」、特にその中でも初めて刊本化され世に流布していった「祖書目次」について、その異本をそれぞれ管見ながら比較検討、そしてその成立の意義について考察したい。

二、「祖書目次」の諸本について

「新撰祖書目次」(以下「祖書目次」と略す)は水戸三味堂榎林の学徒、建立日諦(生没年未詳)が同学の玄得日者と共に編纂した目録である。日諦・日者は、「祖書目次」と同時に「高祖年譜」「高祖年譜攷異」を撰し、聖人伝の顕彰に努めた。「祖書目次」では「録内御書」「録外御書」「他受用御書」「品類御書」中より、諸本による遺文の区別、及びその順序を撤廃して「戒體即身成佛義」から年次に従って配列されており、安永八年(一七七九)に刊行された。

「祖書目次」には

祖書目次題言

高祖示寂之後六子得遺文於四方輯以為録内録外凡若干卷別有逸書數十本亦猶碎金片玉豈可棄哉頃年同志日諦欲次其著述年月以為目次然而伝写所致年月或脱或誤者不為少於於是考訂孜孜遂卒其業所録書目凡三百五十有五録外之中係偽撰者則除之真偽難定者姑闕以俟來哲云尋又有年譜之撰余與焉今茲併目次上梓夫年譜之所具列多取諸遺文而目次之設以便初学之読遺文者所以同刻也  
安永己亥春二月  
釋 玄得識

と玄得日者の「題言」が付されており、それには三百五十五編の遺文を編年体に集成したとある。

この「祖書目次」の諸本について管見の限り①安永八年に刊行された収録遺文数三百五十五編の「祖書目次」(以下、「安永本」と略す)、②弘化三年(一八四六)に改刻された収録遺文数三百五十八編の弘化改訂本「祖書目次」(以下、「弘化改訂本」と略す)、さらに新たに確認することができた③常忍寺寄贈日蓮教学研究所架蔵写本「祖書年序新目録」(収録遺文数三百五十一編。以下、「常忍寺本」と略す)の三本の異本を確認することができる。  
ここで各目録の冒頭に掲げられている文と編者の記載を並べてみると左の如くである。

①「安永本祖書目次」

祖書目次

〈書目或以所與之名為題有異名者或記其下一書多異名者唯挙其一爾〉  
沙門 健立 録

②「弘化改訂祖書目次」

祖書目次

〈書目或以所與之名為題有異名者或記其下一書多異名者唯挙其一爾〉  
沙門 健立 編次

③「常忍寺祖書目次」

後学 英園 再訂

## 祖書目次

〔書目或以所與之名為題有異名者記其下一書多異名者唯舉其一〕

### 繫年摺「親書所在記攷異之說」

②は①と異なり、「後学 英國 再訂」と附記されている。この記から②は英國日英（二七九三〜一八五六）によつて再校訂が加えられていることがわかる。英國日英は丹後妙円寺二十一世で文化・文政・天保時代に活躍し、祖書・聖人伝の研究に卓越した学僧である。

③は同じく「編年体御書目録」である「境妙庵目録」との合本であり、筆跡より一筆写本であることがわかる。また冒頭の部分には「沙門 健立 編次／後学 英國 再訂」の記載が無く、「唯挙其一」の後に「繫年摺親書所在記攷異之說」と①、②にはない記載が付されている。鈴木一成氏はこの「祖書目次」について「目次は仁治三年の「戒体即身成仏義」より弘安五年の「与日朗書」に至るまでの三五五篇が年代順に列ねてあり」とし、また浅井要麟氏も著書で「仁治三年の「戒体即身成仏義」から年次に従つてこれを配列して、弘安五年の朗師讓狀に至るまで、三五五十五章を「祖書目次」と題した。」としている。しかし今回考察を加えた結果、収録遺文の異なる「祖書目次」中、三百五十五編を収載しているのは①のみであり、両氏は①を研究資料としたか、また「題言」に記してある旨を述べているか、現在知ることが出来ないが、②の収録遺文数を確認することはなかつたと推察される。

では次にその内容、つまり「祖書目次」諸本の遺文配列について事例を数点挙げその相違をみてみたい。

### 三、「祖書目次」諸本における遺文配列の比較検討

「安永本」、「弘化改訂本」、「常忍寺本」の各目録を比較し、それぞれの差違を数点ではあるが確認してみたい。先に確認すべきことは「常忍寺本」の年号配列の誤りである。本来ならば「安永本」・「弘化改訂本」の如く、弘長年間は一二六一〜一二六四年の四年間であり正元年間（一二五九〜一二六〇）、文応年間（一二六〇〜一二六一）の後に配列されなければならないが、「常忍寺」では正元年間と文応年間の間に配列されていることが次頁の表より看取できる。

では各「祖書目次」の内容、つまり遺文配列の相違について数点ではあるが比較検討したい。まず正元年年において、「安永本」・「弘化改訂本」ともに「爾前得道有無」・「爾前二乗菩薩不作佛事」の二遺文が配されているのが確認できる。しかし「常忍寺本」では「爾前得道有無」・「爾前二乗菩薩不作佛事」の二遺文は弘長二年に配されている。また「常忍寺本」では正元年年に「今此三界合文」・「後五百歳合文」・「日本真言」・「六凡四聖」の四遺文が配されているが、「安永本」・「弘化改訂本」は次の文応元年に配している。つまりこの点は「常忍寺本」の独自遺文配列として指摘できる。

	①祖書目次(安永本) 仁治三年壬寅【二二四二】 戒体即身成仏義 正嘉二年戊午【二二五八】 一代大意 一念三千 十如是 一念三千法門	②祖書目次(弘化改訂) 仁治三年壬寅【二二四二】 戒体即身成仏義 正嘉二年戊午【二二五八】 一代大意 一念三千 十如是 一念三千法門	③常忍寺祖書目次 仁治三年壬寅【二二四二】 戒体即身成仏義 正嘉二年戊午【二二五八】 一代大意 一念三千理事 十如是事 一念三千法門
	正元元年己未【二二五九】 守護国家論 念仏五篇 十法界抄 爾前得道有無 爾前一乗菩薩不作佛事	正元元年己未【二二五九】 守護国家論 念仏五篇 十法界抄 爾前得道有無 爾前一乗菩薩不作佛事	正元元年己未【二二五九】 守護国家論 念仏五篇 十法界抄 今此三界合文 後五百歳合文 日本真言 六凡四聖 弘長元年辛酉【二二六一】 与富木五郎常忍書 与椎池四郎書 与普門書 弘長二年壬戌【二二六二】 与工藤左近吉隆書

教機時国抄 顯勝法抄 上行菩薩結要付属口伝 爾前得道有無 爾前一乗菩薩不作佛事
---

次に文応元年をさらに見ると「安永本」「常忍寺本」において「一代五時系図」の次に「七重勝劣」が配されているのが確認できるが、「弘化改訂本」では「七重勝劣」を文永七年に配しており、「弘化改訂本」の独自遺文配列であることが指摘できる。

①祖書目次(安永本) 文応元年庚申【二二六〇】 災難対治抄 十法界明因果抄 唱法華題目抄 立正安国論 一代五時系図 七重勝劣 衣座室 今此三界合文 後五百歳合文 日本真言 六凡四聖	②祖書目次(弘化改訂) 文応元年庚申【二二六〇】 災難対治抄 十法界明因果抄 唱法華題目抄 立正安国論 一代五時系図 衣座室 今此三界合文 後五百歳合文 日本真言 六凡四聖	③常忍寺祖書目次 文応元年庚申【二二六〇】 災難対治抄 十法界明因果抄 唱法華題目抄 立正安国論 一代五時系図 七重勝劣 衣座室
--	---	--

①祖書目次(安永本) 文永七年庚午【二二七〇】 与富木氏書 与檀越某書 与四条三郎左衛門頼基書 与曾谷次郎左衛門教信書 与富木氏書	②祖書目次(弘化改訂) 文永七年庚午【二二七〇】 与檀越某書 与四条三郎左衛門頼基書 与曾谷次郎左衛門教信書 与富木氏書 与日進書	③常忍寺祖書目次 文永七年庚午【二二七〇】 与富木氏書 与檀越某書 与四条三郎左衛門頼基書 与曾谷次郎左衛門教信書 与富木氏書
真言天台勝劣 善無畏三藏抄 秀句十勝	真言天台勝劣 七重勝劣書 善無畏三藏抄 秀句十勝	真言天台勝劣 善無畏三藏書 秀句十勝抄

今確認した「弘化改訂本」の独自遺文配列は次の弘長元年の遺文配列にもいえ、すなわち「安永本」・「常忍寺本」では「与富木五郎常忍書」・「与椎地四郎書」・「与普門書」の三遺文が弘長元年に配列されているのを確認できるが「弘化改訂本」をみると弘長元年には以上の遺文が配されておらず、「与椎池四郎書」が弘安四年に配されているのが確認できる。またこの弘長元年には「安永本」・「弘化改訂本」において「与船守弥三郎書」が配されているのが確認できるが「常忍寺本」には「与船守弥三郎書」がみられない。

①祖書目次(安永本)		②祖書目次(弘化改訂)		③常忍寺祖書目次 弘長元年辛酉【二二六一】 与富木五郎常忍書 与椎池四郎書 与普門書	弘長二年壬戌【二二六二】 与工藤左近吉隆書 教機時国抄 顯謗法抄 上行菩薩結要付囑口伝
①祖書目次(安永本) 弘長元年辛酉【二二六一】 与富木五郎常忍書 与椎地四郎書 与普門書	②祖書目次(弘化改訂) 弘長元年辛酉【二二六一】 与船守弥三郎書 与工藤左近吉隆書 教機時国抄 顯謗法抄	③常忍寺祖書目次 弘長二年壬戌【二二六二】 与工藤左近吉隆書 教機時国抄 顯謗法抄 上行菩薩結要付囑口伝	弘長元年辛酉【二二六一】 与富木五郎常忍書 与椎池四郎書 与普門書	弘長二年壬戌【二二六二】 与工藤左近吉隆書 教機時国抄 顯謗法抄 上行菩薩結要付囑口伝 爾前得道有無 爾前一乘菩薩不作仏事	

①祖書目次(安永本) 弘長元年辛酉【二二六一】 与富木五郎常忍書 与椎地四郎書 与普門書	②祖書目次(弘化改訂) 弘長元年辛酉【二二六一】 与船守弥三郎書 与工藤左近吉隆書 教機時国抄 顯謗法抄	③常忍寺祖書目次 弘長二年壬戌【二二六二】 与工藤左近吉隆書 教機時国抄 顯謗法抄 上行菩薩結要付囑口伝	弘長元年辛酉【二二六一】 与富木五郎常忍書 与椎池四郎書 与普門書	弘長二年壬戌【二二六二】 与工藤左近吉隆書 教機時国抄 顯謗法抄 上行菩薩結要付囑口伝
--	---	---	--	---

①祖書目次(安永本) 弘安四年辛巳〔二二八二〕 与南条氏妻書 与七郎次郎書 報日進書 三大秘法書 与門人書 与兵衛志書	②祖書目次(弘化改訂) 弘安四年辛巳〔二二八二〕 与南条氏妻書 与七郎次郎書 報日進書 三大秘法書 与樫池四郎書 与門人書 与兵衛志書	③常忍寺祖書目次 弘安四年辛巳〔二二八二〕 与南条氏妻書 与七郎次郎書 報日進書 三大秘法書 与門人書 与兵衛志書
--	---	--

続いて文永年間をみると、文永元年では『安永本』・『常忍寺本』において「報大学三郎妻書」の次に「法華真言勝劣」、「与南条兵衛七郎書」の次に「木絵二像開眼書」が配されているのが確認できるが『弘化改訂本』では文永元年にその二遺文が配されておらず、「法華真言勝劣」については文永六年、「木絵二像開眼書」は文永十一年に配されているのが確認できる。

①祖書目次(安永本) 文永元年甲子〔二二六四〕 報檀越某書 報大学三郎妻書 法華真言勝劣	②祖書目次(弘化改訂) 文永元年甲子〔二二六四〕 報檀越某書 報大学三郎妻書	③常忍寺祖書目次 文永元年甲子〔二二六四〕 報檀越某書 報大学三郎妻書 法華真言勝劣
--	---	--

当世念仏者無間地獄事 与南部某書 与南条兵衛七郎書 木絵二像開眼書	当世念仏者無間地獄事 与南部某書 与南条兵衛七郎書	当世念仏者無間地獄事 与南部某書 与南部兵衛七郎書 木絵二像開眼書
--	---------------------------------	--

①祖書目次(安永本) 文永六年己巳〔二二六九〕 与富木氏書 与檀越某書 題立正安国論後	②祖書目次(弘化改訂) 文永六年己巳〔二二六九〕 与富木氏書 与檀越某書 法華真言勝劣 題立正安国論後	③常忍寺祖書目次 文永六年己巳〔二二六九〕 与富木氏書 与檀越某書 題立正安国論後
---	--	---

①祖書目次(安永本) 文永十一年甲戌 与門人書	②祖書目次(弘化改訂) 文永十一年甲戌 与門人書	③常忍寺祖書目次 文永十一年甲戌 与門人書
-------------------------------	--------------------------------	-----------------------------

立正観抄 顯立正意 与四条氏書 報光日尼書	顯立正意 立正観抄 与四条氏書 木絵二像開眼書 報光日尼書	立正観抄 顯立正意 与四条氏書 報光日尼書
--------------------------------	---	--------------------------------

文永三年をみると文永元年と同じく「安永本」・「常忍寺本」には「法華題目抄」の次に「報富木氏書」が配されているのが確認できるが、「弘化改訂本」では「報富木氏書」が配されておらず「復日進書」が配されている。さらにこの文永三年には「常忍寺本」において「報星名五郎太郎書」を確認できるが、「安永本」・「弘化改訂本」では文永三年に配しているのを確認でき、同時に「常忍寺本」には文永四年の記載がないことが指摘できる。

①祖書目次（安永本） 文永三年丙寅【二二六六】 法華題目抄 報富木氏書	②祖書目次（弘化改訂） 文永三年丙寅【二二六六】 法華題目抄 復日進書	③常忍寺祖書目次 文永三年丙寅【二二六六】 法華題目抄 報富木氏書 報星名五郎太郎書
文永四年丁卯【二二六七】 報星名五郎太郎書	文永四年丁卯【二二六七】 報星名五郎太郎書	

文永九年をみると始めに「弘化改訂本」に「初心成仏抄」が配されているのが確認できる。この「初心成仏抄」は「安永本」・「常忍寺本」においても「与三子書」の次に配されているが、「与三子書」自体の配列がそれぞれにおいて異なり、「安永本」では「報富木氏書」の次、「常忍寺本」では「報僧強仁書」の次に配列されている。この「与三子書」については「弘化改訂本」は「安永本」と同位置に配列さ

れている。

さらに「常忍寺本」文永九年に配列されている「草木成仏口訣」であるが、この「草木成仏口訣」は別称「与（報）最蓮房書」であり、この点より遺文名称の変更が「常忍寺本」においてなされたことが確認できる。また「弘化改訂本」・「常忍寺本」において「与富木氏書」の次に「法華取要抄」が配されていることが確認できるが「安永本」には文永十一年の「与遠藤左衛門書」の次に配されている。さらに「安永本」・「常忍寺本」において「与檀越某妻書」の次に「与檀越某妻書」が配されているが「弘化改訂本」では「与檀越某妻書」の次に「与四条氏書」が配されている。

①祖書目次（安永本） 文永九年壬申【二二七二】 法華浄土問答 報最蓮書 与最蓮書 開目抄 報阿仏書 与門人書 与富木氏書 報最蓮書	②祖書目次（弘化改訂） 文永九年壬申【二二七二】 初心成仏抄 法華浄土問答 報最蓮書 報最蓮書 開目抄 報阿仏書 与門人書 与富木氏書 報最蓮書	③常忍寺祖書目次 文永九年壬申【二二七二】 法華浄土問答 報最蓮書 草木成仏口訣 開目抄 報阿仏房書 与門人書 与富木氏書 報最蓮書
--	--	---

得授職人功德法門抄 与四条氏書 与富木氏書	得授職人功德法門抄 与四条氏書 与富木氏書 法華取要抄	得授職人功德法門抄 与四条氏書 与富木氏書 法華取要抄
-----------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------

与日妙書 真言宗調伏秘法 与日昭等書 与四条氏書 八宗異目 与檀越某妻書 与檀越某書	与日妙書 真言宗調伏秘法 与日昭等書 与四条氏書 八宗異目 与檀越某妻書 与檀越某書	与日妙書 真言宗調伏秘法 与日昭等書 与四条氏書 八宗異目 与檀越某妻書 与檀越某書
--	--	--

①祖書目次(安永本) 建治元年乙亥〔一二七五〕 与四条氏書 与中興某妻書 与曾谷氏書 与一谷次郎妻書 与棧敷女書 与妙一尼書 撰時抄 与千日尼書	②祖書目次(弘化改訂) 建治元年乙亥〔一二七五〕 与四条氏書 与中興某妻書 与一谷次郎妻書 与棧敷女書 与妙一尼書 撰時抄 与千日尼書	③常忍寺祖書目次 建治元年乙亥〔一二七五〕 与四条氏書 与中興某書 与曾谷氏書 与一谷次郎妻書 与棧敷女書 与妙一尼書 撰時抄 与紺尼書
---	---	---

与大内三郎安清書 与淨蓮書 与大学三郎書	与大内三郎安清書 与淨蓮書 与曾谷氏書 与大学三郎書	与大内三郎安清書 与淨蓮書 与大学三郎書
----------------------------	-------------------------------------	----------------------------

報僧強仁書 報大田氏書 報富木氏書 与三子書 初心成仏抄 与富木氏書 与檀越某書 与豆子尼書 与檀越某書 与檀越某書 与日進書	報僧強仁書 報大田氏書 報富木氏書 与三子書 与富木氏書 与檀越某書 与豆子尼書 与檀越某書 与檀越某書	報僧強仁書 与三子書 初心成仏書 与富木氏書 与檀越某書 与豆子尼書 与檀越某書 与檀越某書 報日進書
---	--	---

最後に弘安年間に移ると「安永本」・「弘化改訂本」において「与七郎次郎書」の次に「報千日尼書」が配されているのが確認できる。しかし「常忍寺本」には「報阿仏坊尼書」と記されており、ここに先と同様、「常忍寺本」による遺文の名称変更がなされたことが指摘できる。また「弘化改訂本」にて「与四条氏書」の後に「報四条

氏書」が配されているのが確認できるが、「安永本」・「常忍寺本」にては「報四条氏書」の配列が確認できない。さらに「弘化改訂本」にて「与堀内某書」の次に「与九郎太郎書」「与檀越某書」「与七郎次郎書」が確認できるが「安永本」・「常忍寺本」において「与九郎太郎書」「与檀越某書」は同年内の後に配されていることが確認できる。

①祖書目次(安永本) 弘安元年戊寅〔二二七八〕 報実相寺豊前書	②祖書目次(弘化改訂) 弘安元年戊寅〔二二七八〕 報実相寺豊前書	③常忍寺祖書目次 弘安元年戊寅〔二二七八〕 報実相寺豊前書
---------------------------------------	--	-------------------------------------

与七郎次郎書 報千日尼書 与北条氏書 与妙心尼書 報妙法尼書 与四条氏書 与七郎次郎書 本尊問答抄 与大田氏妻書 与堀内某書	与七郎次郎書 報千日尼書 与北条氏書 与妙心尼書 報妙法尼書 与四条氏書 報四条氏書 与七郎次郎書 本尊問答抄 与大田氏妻書 与堀内某書 与九郎太郎書	与七郎次郎書 報阿仏房尼書 与北条氏書 与妙心尼書 報妙法尼書 与四条氏書 与七郎次郎書 本尊問答書 与太田氏妻書 与堀内某書
---	--	--

弘安二年己卯〔二二七九〕 与檀越某書	弘安二年己卯〔二二七九〕 与檀越某書 与持妙尼書	弘安二年己卯〔二二七九〕 与檀越某書
報四条氏書 与九郎太郎書	与檀越某書 与七郎次郎書 与四条氏書 与兵衛志書	与四糸氏書 与南条九郎太郎書

#### 四、小 結

以上、「祖書目次」諸本の遺文配列について数点事例を挙げ、確認した。この遺文配列における差異(傍線の箇所)の確認を受け、

A ①・②同一記載、③記載なし  
 B ②・③同一記載、①記載なし  
 C ①・③同一記載、②記載なし  
 D ①のみ記載  
 E ②のみ記載  
 F ③のみ記載

と以上の六点が指摘でき、これより

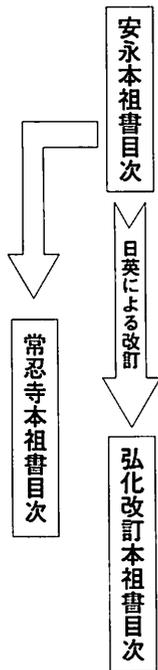
(一) ③は①を底本とした可能性が高い。(B・Cによる)

(二) ③は②成立以前に書写されたか、あるいは②に依っていない。(B・Eによる)

(三) ③は①②の間に成立した可能性が高い。

の三点が考察される。これらを踏まえると【図1】のように「常忍寺本」が成立したと考えられるのである。

【図1】



さらにこの結果をおまえ「常忍寺本」成立について、前述の鈴木一成氏が指摘した「この三部は出版後間もなく火災の為板木を焼失、絶版となっていた」の一文から、「安永本」はその出版部数が少なく希少であった、また当時刊本も書写されることが多くあったことより「常忍寺本」の筆者は「安永本」をただ書写するだけでなく自らの見解を踏まえ、「祖書目次」(「安永本」)の異本を作製し、それを受容していたことが伺えるのである。それはまた日英による弘化年間の改訂を受けてはいないながらも同一部分も見受けられ、このことより筆者はかなりの学僧(もしくは在家知識人)であったと推察できる。

近世において遺文を流布させた中心的な書籍は、「録内御書」「録

外御書」などの集成本であり、そしてその遺文配列は、重要な遺文から配されていたことは先に述べたとおりである。しかし「編年体御書目録」の登場によって、その後の集成本の遺文配列はこれまでそれと大きく異なっていくのである。つまり遺文系年に従って遺文を配列することにより、「編年体御書目録」成立以前の遺文集では困難であった聖人の生涯、および思想信仰の潮流を遺文を通じて追体験することが可能になったということであり、これを初めて刊本により世に流布させたという視点から「祖書目次」の存在は当時の日蓮教学を学んでいた学僧らにとつては大いなる驚きと新たな学問深化をもたらすものであった。またさらにこのような学僧らの目に触れることによりさらなる遺文の系年推定や遺文の開合・添加・除去が頻繁に行われ、「編年体御書目録」もその時に応じ、新たに手が加えられ、これが結果的に異本が生じていった大きな原因であったのあろうと推察されるのである。

(一) 浅井要麟編「昭和新修日蓮聖人遺文全集」(平楽寺書店、昭和九年)

別巻四一頁

(二) 山川智応著「本化聖典解題提要 通論」(天業民報社、大正十二年)

二頁

(三) 浅井要麟編「昭和新修日蓮聖人遺文全集」(平楽寺書店、昭和九年)

別巻四一一〜四一八頁、同著「日蓮聖人教学の研究」(平楽寺書店)

昭和二十年) 五三、六〇頁

(四) 鈴木一成著「日蓮聖人遺文の文献学的研究」(山喜房仏書林・昭和四十年) 一三五、一四二頁

(五) 山川智応稿「御書新目録の著者について」(「法華」一九卷九号所収、昭和八年) 同稿「再び「御書新目録」の著者に就て」(「法華」一九

卷二二号所収、昭和八年) 同稿「再び「御書新目録」の著者に就て」(「棲神」一八号所収、昭和八年)

(六) 浅井要麟稿「境妙庵目録著者考」(「大崎学報」五五号、昭和九年)

(七) 世古政順稿「境妙庵目録小考」(「棲神」一八号所収、昭和八年)

(八) 堀日亨稿「宗門に於ける祖書編輯について」(「大日蓮」五卷一、二、三、四号・五号・五号・七号・八号・十号・十一号・六卷一、二、三、四号・五号・六号。大正九年、大正十年)

(九) 安中尚史稿「近代日蓮宗の動向―加藤文雅についての一考察」(「日蓮教学研究所紀要」十六号、平成元年)

同氏稿「近代日蓮宗の動向(二)―縮刷遺文編纂についての一考察」(「棲神」六十二号、平成二年)

同氏稿「靈長閣版「日蓮聖人御遺文」(縮刷遺文)編纂についての一考察」(「日蓮教学研究所紀要」十七号、平成二年)

同氏稿「明治期における日蓮遺文集編纂の一考察」(高木豊・冠賢二編「日蓮とその教団」、吉川弘文館、平成十一年)

(十) 建立日誦(生没年未詳) は水戸檀林の学徒。事歴不詳。同学の玄得日香と共に「高祖年譜」「高祖年譜攷異」(共に安永八年刊)を著した。

(日蓮宗事典刊行委員会編「日蓮宗事典」、東京堂出版、昭和五十六年。八六頁)

(十一) 浅井要麟編「昭和新修日蓮聖人遺文全集」(平楽寺書店、平成十一年) 別巻四一四頁

(十二) 安永八年本「祖書目次」「題言」一丁ラ、一丁ウ、調点原文ママ

(十三) 鳥取常忍寺寄贈立正大学日蓮教学研究所架蔵本「祖書年序新目録」

(十四) 「安永本祖書目次」二丁ラ・「弘化改訂祖書目次」二丁ラ

(十五) 英國日英は優陀那日輝(金沢立像寺三二世)よりも七歳の年長で、

同時代に活躍した、卓越した学僧である。京都本国寺二六世了義日蓮の学系に属する遠成日底(一八一八)を学師として学び、諸方に工学の後、鷹ヶ峰、山科、飯高、松ヶ崎等の諸檀林の化主となつて後学を育成した。丹後妙円寺、備後妙頭寺を歴住し、安政三年遷化。寿六四歳。日英はその学問的努力を、述作よりも章疏の編集、校訂に傾注し、祖書、祖伝の研究に多大の便宜を提供している。(日蓮宗事典刊行委員会編「日蓮宗事典」、東京堂出版、昭和五十六年。五七七頁・「日蓮宗章疏目録」、東方出版、昭和五十四年。二九二、二九三頁参照)

(十六) 拙稿「編年体御書目録についての一考察―特に「境妙庵目録」を中心に―」(立正大学日蓮教学研究編「日蓮教学研究所紀要」第三三三号) 参照

(十七) 鈴木一成著「日蓮聖人遺文の文献学的研究」(山喜房仏書林、昭和四十年) 一三九頁

(十八) 鈴木一成著『日蓮聖人遺文の文献学的研究』(山喜房仏書林、昭和四十年) 一四〇頁

〈キーワード〉

日本近世 日蓮宗出版史 日蓮聖人遺文 編年体御書目録  
遺文配列